

海外研究報告書  
[中世ロシアの教会建築]  
ヴラジミル地方の都市計画

平成20年度文部科学省G P「国際化拠点整備事業（長期海外留学支援）プログラム」採択  
龍谷大学「長期海外留学支援プログラム」採択

龍谷大学大学院 国際文化学研究科 博士後期課程3年

川村明海(Akemi Kawamura)



はじめに

報告者は2008年9月より2010年8月までモスクワ国立大学アジア・アフリカ学院を通して、モスクワ国立大学歴史学部にて研究調査を行ってきた。この留学は、平成20年度文部科学省GP「国際化拠点整備事業（長期海外留学支援）プログラム」に採択され、龍谷大学「長期海外留学支援プログラム」により、実現可能となった研究調査である。

#### <研究目的>

ロシアの「二重信仰」に関する専門的な研究は日本では行われていない。報告者は、現在執筆中の博士論文で、歴史学、建築学、図像学、とあらゆる分野からのアプローチを試みた。特に、レリーフ解析（図像学）という手法は文献資料を補う有効手段であり、可能な限り利用して「二重信仰」を説明しようとしている。今回の海外研究調査では、「教会外壁レリーフには土着信仰とキリスト教の両方の要素を含み、レリーフが民衆にキリスト教受容を促した」という報告者の仮説を説明するべく資料収集のために実施した。

「二重信仰」とは、ヴラジミルが988年にロシア（当時のキエフ・ルーシ）において、キリスト教を国教化した結果、土着信仰とキリスト教が並立して、生活や儀式の中に受容される過程のことである。ロシアにおいて特徴的なことは、「上から」の改宗であったために農村では19世紀まで土着信仰が根強く残っていたこと、12世紀には地方分権化が進む中で地域によって教会のあり方が異なっていたことである。

特に報告者の関心は、ヴラジミルの教会建築様式や、ロシアの他地域では見られない教会外壁にレリーフが施されていることである。ロシアの世界観において、教会外壁レリーフにある各モチーフ（ライオン、鳥、アカンサス、ぶどうなど）が意味するものは何であるのか？木村浩は『ロシアの美的世界』で「キリスト教のシンボルを土着信仰の神格の上部に表現することでキリスト教の優位性を示した」としているが、その根拠になる資料は示していない。報告者の見解では、植物や動物をレリーフで表現することでキリスト教の神格と土着信仰の神格を同格で示したと考える。また、二重信仰の宗教的意義のほかに、政治的意義が含まれている可能性もあると考える。そこで、今回現地調査を行った主な対象教会建築は以下の通りである。

- ・ウスペンスキー聖堂（1158-1161年 ウラジーミル）
- ・ドミトリエフスキー聖堂（1158-1165年 ウラジーミル）
- ・ロジュデェストベンスカヤ修道院（ボゴリュボヴォ）
- ・ポクロフ・ナ・ネルリ教会（1165年 ボゴリュボヴォ）
- ・ユーリエフ・ポクロフスキー聖堂（1230-1234年、1471年 ウラジーミル）

近郊)

- ・ロジュデエストヴェンスキー聖堂 (12-18 世紀 スズダリ)
- ・ゲオルギエフスキー聖堂 (ユーリエフ・ポクロフスキー)

博士論文では、教会建築を建設するに至った歴史的・政治的背景を明らかにし、都市計画を年代別に分析し、教会建設に携わった職人の問題や、他公国およびビザンティンとの外交問題など、教会レリーフが施されるまでの数々の疑問を証明しようと試みている。この報告書は、海外研究調査の報告にとどまるものではなく、報告者の博士論文執筆に際し重要な資料として利用するものである。この一連の調査を通して、ウラジミルにおいて教会外壁レリーフが民衆に与えた影響とはいかなるものであったか？という問いに対し、文献資料だけでなく画像学を用いた手法によって解明することは、ロシア人の信仰を考察する上で非常に大きな成果になると考える。レリーフの文様解明は、土着信仰を長期間保持した民衆の考え方やキリスト教が民衆の生活に及ぼした影響を検討する上で、基本的な資料となるであろう。さらに、この資料を多くの方々と共有することで、ロシア人の文化的背景、ロシア人の芸術に対する造詣の深さ、国際色豊かな文化を受容し発展させることのできる寛容さを伝え、今後の日本とロシアが文化的友好をさらに深めていくことを祈願する。

<国際文化学的視点における本研究の意義>

報告者は、国際文化学的立場から、ウラジミル市の研究および先行研究についての論証を試みる。ウラジミル市の建築装飾の問題を考える際、時代が変遷するたびに国境もしくは領域の変更が必要になる。10～13 世紀のルーシを簡単に旧ソ連、現在のロシアの国境線を念頭において見ることは危険である。なぜならば、報告者の研究対象地域であるウラジミル市は現在のロシア国内に所在するが、当時ルーシ諸公国の中心であったキエフ公国と関係づけて考察することは必要不可欠で、きわめて重要なことだからである。キエフ公国は現在のウクライナにあった。国際文化学的視点では、空間的あるいは時間的制限を超えて考察することが必要である。国際文化学は近現代の課題として適用させることが一般的であるように思われがちであるが、報告者の論考対象時期である 10～13 世紀のように古い時代の研究にも適用させるべきである。さらに、既成の学問分野を超えて検証することは言うまでもない。本稿では国際文化学的な視点を意識し、ウラジミル市を対象にした地域研究において必要な資料を可能な限り収集し、それらを活用した。

報告者が主として参照するのは、美術史学者 N・N・ヴォロニンの”

Зодчество Северо-Восточной Руси XII-XV вв.”の研究書（1961年刊）である。彼は歴史学、建築学、地層学、画像学、言語学と多角的な観点からヴラジミル市、スズダリ周辺の研究をまとめている。1961年当時「国際文化学」という学問体系こそ提唱されてはいなかったが、学際的論文として評価して良いと思われる。

<海外研究調査を終えて>

留学期間中、モスクワ国立大学アジア・アフリカ学院国際部部長教授 Solodovnik Diliara 女史、国際部担当官 Umida Alyakbarova 女史には歴史学部との交渉などいろいろと御配慮をいただき、ご尽力頂いた。モスクワ国立大学歴史学部美術史学科 Aleksandr Pleobrajenski 教授は授業の聴講を快諾してくださり、個人指導をして下さった。Aleksandr Pleobrajenski 教授から頂いた書籍リストは、この研究調査で一番大きな収穫の一つであったと言える。

さらに、モスクワ国立大学地理学部の日本・日本語担当教授 Irina Sergevna 女史を通じてロシア文科系国立大学ドミトロフ校経済学部教授 Anastasia Banchaeva 女史にはたくさんのエクスクールシアに連れて行っていただき、個人指導も熱心にして頂いた。Anastasia Banchaeva 女史は学部を超えて、歴史学部と経済学部合同の学会にも招待してくださり、学術雑誌の論文投稿も可能にして下さった。ドミトロフという町は、ユリー・ドルゴルーキーが北東ルーシを開拓する宣言をした場所である。報告者の研究対象地域で、学会に参加し、論文を発表できたこと、個人的に専門家を招致して報告者のために現地視察を可能にして下さったことを、ここに特筆しておきたい。

日本国内においては、龍谷大学の諸先生方、事務の方々には2年間の留学の機会を与えて頂いた。龍谷大学国際文化学部教務課が担当部署として、報告者の留学全般にわたってご支援して下さいました。特に、龍谷大学国際文化学部教務課課長北條英明氏、阿部俊彦氏には文部科学省への申請からこの報告に至るまで一貫して支えていただいた。指導教官の松原廣志先生には辛抱強く報告者の留学を見守って下さった。感謝とともに、お礼申し上げたい。

この報告書はロシア・ヴラジミルおよび周辺地域、比較対象になるウクライナ・キエフ地域を中心に海外調査にて収集した文献資料及び、写真資料を精査してまとめた。研究分析は現在進行中で不完全な個所があることをご了解いただくとともに、この報告書では、報告者が収集してきた写真資料をできるだけ多く掲載しようと試みた。

## <目次>

1. 都市ヴラジミルの成立	5
2. ヴラジミル市発展の3段階	7
3. アレクサンドル・ボゴリュプスキーの政策	10
4. 周辺都市ボゴリュウボヴォ	11
1) ボゴリュウボヴォの地形	11
2) ボゴリュウボヴォ女子修道院	13
3) ポクロフ・ナ・ネルリ教会	16
5. ヴラジミルの教会	18
1) ウスペンスキー聖堂	18
2) ドミトリエフスキー聖堂	20
3) レリーフが持つ世界観	22
6. キエフとの関係性	29
1) ルーシにおけるキエフの立場	29
2) キエフの教会建築とヴラジミルとの関係	30
7. ノヴゴロドとの比較において	32
1) 教会建築繁栄の背景	32
2) 民衆レベルの文化交流	33
8. 今後の課題と目標	34
巻末：参考文献一覧、参考資料	36

## 1. 都市ヴラジミルの成立

キエフ公国中心のルーシにおいて、ヴラジミル市は 11 世紀に北東に建設された。北東ルーシはヴラジミル・モノマフ<sup>1</sup>が領土拡大の目的で支配下に組み入れた。実質的には、ヴラジミル・モノマフの子ユリー・ドルゴルーキーがドミトロフ市で開拓宣言をした後、都市形成の発展がはじまる。ヴラジミル市が成立するまで、北東地方ではスズダリやロストフが有力都市であり、北東ルーシはロストフ・スズダリと呼ばれていた。10 世紀から 11 世紀にかけて、スズダリは豪族によって繁栄し、ロストフは軍事都市として成立していった。周辺の異民族からの攻撃に対抗するため、この頃のルーシの都市国家は軍事国家に成長する傾向が強かった。スズダリでは、各村に軍隊を保持し、土地の争奪を繰り返していた。9 世紀から 10 世紀にはロストフやスズダリの周辺に村落規模の植民地が多く点在した。ヴラジミル市もその一つである。特に、11 世紀にはロストフでは豪族が住民、商人、手工業者たちの利益を自分たちのものとした。ゆえに、奴隷のような生活を強いられていた住民や商人、手工業者たちは新たな地へと逃亡した。この新たな地が後にヴラジミル市となる。ヴラジミル市は、石造建築だけでなく木造建築や建築装飾など、建築に携わる仕事を主要産業として栄えていた。しかし、有力豪族からの逃亡民であることや搾取による生活苦が理由で、ヴラジミル市の住民達は、自分たちを「小さきものたち」と称した。

多くの都市が支配者と被支配者、つまり豪族と奴隷の関係によって構成されていた。これを N・N・ヴォロニン<sup>2</sup>はアリストテレス的支配構造と呼ぶ。しかし、逃亡した奴隷によって都市形成を成したヴラジミル市は形成初期には身分区別は比較的緩やかだったと思われる。N・N・ヴォロニンはもっとはっきりと、「ヴラジミルはアリストテレス的な支配構造は持っていなかった」と断言している。ヴラジミル市の発展は速く、1169 年ヴラジミル市がキエフ公国との戦いに勝利して、ルーシの首都となった。12 世紀の資料によると、この時期、北東ルーシで繁栄を見ていた都市は、ヴラジミル市の他にロストフ、スズダリ、ペヤスラヴリ・ザレスキー、ドミトロフ、ウグリチ、ズブトフ、モログ、ユリエフ、モスクワ、ヤロスラヴリ、トヴェリ、ガリチ・メリスキー、ゴロデッツなどである。フセヴォロド 3 世以降、ヴラジミル「市」ではなく、ヴラジミル「公国」と呼ぶことになる。本報告で

---

<sup>1</sup> ヴラジミル・モノマフ（在位 1113-1125）はヤロスラフ大公の子フセヴォロドとビザンツ皇帝コンスタンティノス 9 世の娘の間に生まれた。キリスト教意識を政治的イデオロギーに利用し、年代記編纂に尽力した。また、民族蜂起対策として債務の取り決めに法規するなど、内政改革を行った。（参考：田中陽兒・倉持俊一・和田春樹編集『ロシア史 1-9~17 世紀』山川出版社、1995 年、p.129 参照）

は、主にヴラジミル市及び狭い範囲での周辺地域のみを扱うため、ヴラジミル市と統一する。しかし、下述(後述)でキエフ公国やノヴゴロド公国との関係を立証し比較を試みる時、公国と同じ規模でヴラジミル市を考察している。



### 1. ヴラジミルの都市計画 7-8 世紀.

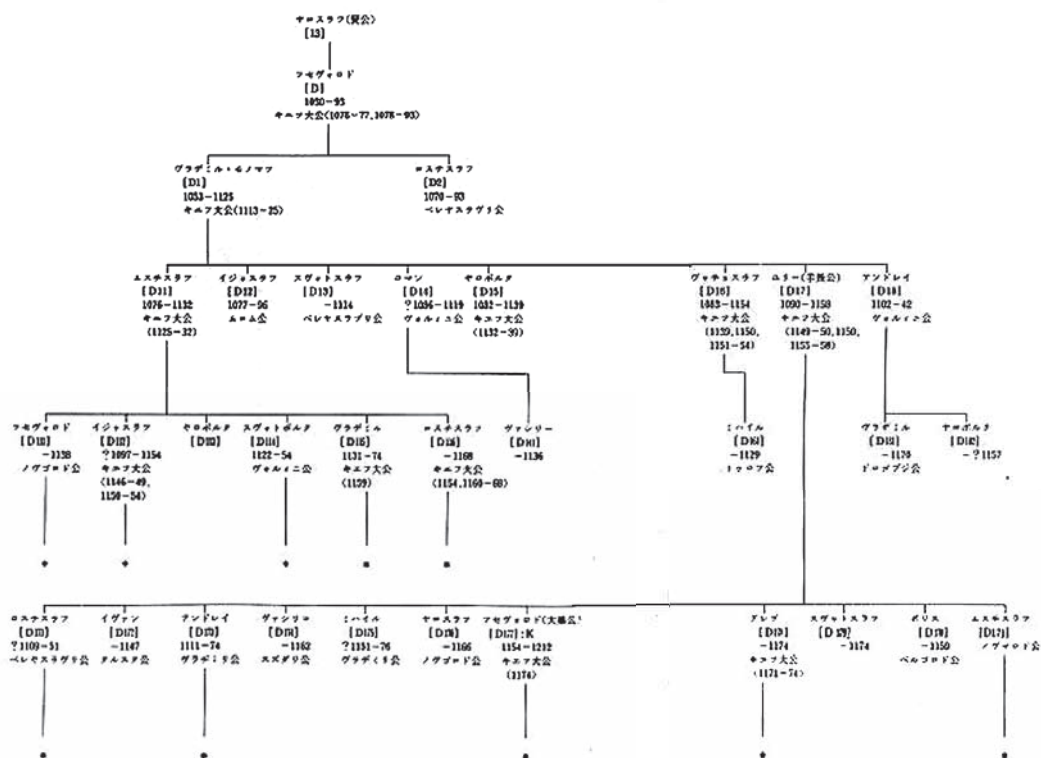
I – モノマフ町(«ペチェルニの町»), 1108; II -«家畜の町», 1158-1164 гг.; III -«新しい町», 1158-1164 гг.; IV-城塞, 1194-1196 гг.; 1.スパス教会, 2. ゲオルギヤ教会, I ウスペンスキー聖堂, 4. 黄金の門, 5. イリーナの門, 6. 鉢の門, 7. 銀の, 8. ヴォルガの門, 9. ドミトリエフスキー聖堂, 10. ヴォズネセンスキー修道院, 11. ロジュデエストヴェンスキー修道院, 12. 公の修道院, 13. 商業の門, 14. イワノフの門, 15. 城塞の門, 16. 商売繁盛ヴォズヴィジェニヤ教会

出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской. Книга-спутник по древним городам Владимирской земли. ” М.,«Искусство», 1967.



## 2. ヴラジミル市発展の3段階

まずヴラジミル・モノマフが北東ルーシの基盤を形成した後、ヴラジミル・モノマフの子ユリー・ドルゴルーキー<sup>2</sup>が都市デザインのアイデアを集約し、主要な教会や宮殿の建設を手がけ、ユリー・ドルゴルーキーの子アンドレイ・ボゴリュプスキー<sup>3</sup>が教会や聖堂の建設をユリー・ドルゴルーキーから引き継ぎ発展・完成させた。



家計図

出典：「ロシア原初年代記」国本哲男ほか訳、名古屋大学出版会、1987年

<sup>2</sup> ユリー・ドルゴルーキー（在位 1120-1157年）はヴラジミル・モノマフの子で領土拡大に熱心だった為、手長公とも称される。彼は北東ルーシに留まらず、南ルーシにも内政干渉した。彼の南方政策は、多くの戦いを引き起こしたので、自国内を荒廃させる結果をもたらした。

<sup>3</sup> アンドレイ・ボゴリュプスキー（ヴラジミル公 在位 1157年-1174年）はユリー・ドルゴルーキーの子で、1111年スズダリに生まれ、人生の多くを北東ルーシで送った。自公国の同族者と貴族層を排除し、また南方キエフ諸公との複雑な外交政策を行い、強力な公権力の確立を目指した。1169年キエフ公国を攻略し、首都をヴラジミル市に移した。熱心なキリスト教者であり、貧者に施しをし、多くのキリスト教会建設を命じた。（一部引用 B・O・クリューチェフスキー著八重樫喬任訳『ロシア史講和1』、恒文社、1979年、p.411 参照）

しかし、1186年に大火災で多くの建築物が焼失したことを受け、アンドレイ・ボゴリュプスキーの弟フセヴォロド3世<sup>4</sup>が消失した建物を再建し、外装・内装の装飾まで施した。彼の下で都市として成熟した同市は、都市設計や建築、建築物の装飾に特徴を示している。さらに、600年ほど後の1778年に、ヴラジミル市は再び市中大火災に遭遇し、その後、多くの教会が再建された。18世紀の再建では、旧アンドレイ公邸（宮殿）が、12世紀に建立された時の状態に戻された。報告者は以上の発展過程を表1のように3段階にまとめた。

第1段階は11世紀から12世紀半ばまでで、都市デザインの形成期にあたる。ヴラジミル・モノマフが北東ルーシを開拓した後、彼の北東における活動の拠点はロストフであった。河川の間には多くの植民村が存在し、手工業が発展していた。ここで重要な点は、これらの植民村で石造建築<sup>5</sup>が始まっていたことである。ロストフ南部では石造りの古代建築が繁栄する。実は、10世紀にはロストフに新住民が増加し、11世紀には木工業者が聖堂や住居に装飾を施した。特に、ヴラジミル市の住人は才能豊かであったので、ヴラジミル・モノマフはロストフに多数の木造古代聖堂を立てることが出来た。『ニコン年代記』<sup>6</sup>には、ロストフの豪族がヴラジミル市の住人について語ったことが記されている。そのことから、ロストフには高度な建築文化が発展していたことが伺える。しかし当時は、石造建築はそれまでにない手法を用いた新しい文化であり、北東ルーシの中でもヴラジミル以外の都市には及んでいなかった。そして、ロストフも他公国と同様に、キエフ公国の属国としての役割を果たさなければならなかった。建築文化において、ロストフが高度な建築技術を有しながらキエフ公国に従属し続けたことは、後年のヴラジミル市との決定的な違いである。

第2段階は12世紀半ばから13世紀初頭の都市建設期にあたる。その前半のアドンレイ・ボゴリュプスキー治世の建設ラッシュ期を都市建設前期とし、フセヴォロド3世治世の建設ラッシュ、特に1185年のヴラジミル市中大火災以降の再建時期を都市建設後期とする。ウスペンスキー聖堂（日本

<sup>4</sup> フセヴォロド3世（ヴラジミル公後キエフ公 在位1154年—1212年）はユリー・ドルゴルーキーの子で、アンドレイ・ボゴリュプスキーの弟。子沢山であったため、大巢公とも称される。兄アンドレイ・ボゴリュプスキーの統治を引き継ぎ、北東ルーシを統治しつつ、公の世襲問題に尽力した。

<sup>5</sup> ルーシの建築物の主流は木造建築であった。12世紀、石造建築はキエフ公国、ノヴゴロド公国、ヴラジミルにしか見られない。

<sup>6</sup> 『ニコン年代記』は1520年代末にダニール府主教が編纂したものとされる。9～16世紀を扱い、年代記全集の9巻から14巻に収録されている。きわめて豊富な内容とここにしか出てこない記述などがあって、先行する諸年代記の集大成的位置を占める。17世紀の総主教ニコン所蔵の代表的写本からこの名が付けられた。（引用：田中陽兒・倉持俊一・和田春樹編集『ロシア史1-9～17世紀』、山川出版、1995年、p.92参照）

名：生神女就寝聖堂）を始め、教会や聖堂、公（支配者）の宮殿が相次いで建設された。年代記（年代記名不明）<sup>7</sup>には、1185年ヴラジミル市中が大火災に見舞われたと記されている。その火災により32にも及ぶ教会・聖堂が焼失した。そのため、フセヴォロド3世は1186年から1189年にかけてウスペンスキー聖堂を再建した。

第3段階は都市再建期であり、1778年ヴラジミル市中の大火災以降再建が進んだ。

1157年ゲオルギイ聖堂が建設された場所は、ユリー・ドルゴルーキー公の邸宅であった。1778年の大火災で焼失した後、1783年から1784年の再建によって現在はゲオルギエフスカヤ教会として残存している。このように、焼失・再建を繰り返す中で、建物の名前や役割が変わっていたことは興味深い。表1はヴラジミル市発展の各段階をまとめたものである。



ゲオルギエフスカヤ教会  
報告者撮影 2010年

<sup>7</sup> 引用：N・N・Voronin “Zodchestvo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov” M 1961  
H.H.Воронин”Зодчество Северо-Восточной Руси XII-XV вв.” М. 1961

<表 1> ヴラジミル発展の過程

段階	年代	期名		特徴
第 1 段階	12 世紀まで	都市デザインの形成期		<ul style="list-style-type: none"> <li>・植民村で石造建築が始まる</li> <li>・11 世紀に木工業者が聖堂や住居に装飾を施す</li> </ul>
第 2 段階	12 世紀半ば～ 13 世紀初頭	都市建設期	前期	・教会、聖堂、宮殿の建設ラッシュ
			後期	・1185 年の火災以後の復興・再建
第 3 段階	1778 年以降	都市再建期		<ul style="list-style-type: none"> <li>・1778 年の大火災で多くの建築物が焼失</li> <li>・再建が進み、建物の名前や役割を変えて存在</li> </ul>

本報告では第 1 段階と第 2 段階を中心に扱う。

### 3. アレクサンドル・ボゴリュプスキーの政策

ユリー・ドルゴルーキーの次男としてアレクサンドル・ボゴリュプスキーは 1111 年に北東ルーシ、現在のスズダリに生まれた。彼の母はポロヴェツ族長アエプイの娘であった。ゆえに、アンドレイの肖像画を見ると、アジア的な容貌をしている。彼は生涯の多くを北東ルーシで過ごした。彼は、幼少期よりキリスト教の信仰が深く、宗教的な書物によく親しんでいた。アンドレイ・ボゴリュプスキーは父であるユリー・ドルゴルーキーと同様に、多くの教会や聖堂を建設した。ウスペンスキー聖堂に「聖母マリア」のイコンを納める際、建てられたばかりの門が崩れ多くの民衆が下敷きなる惨劇があった。彼は教会の祭壇の前で、自分の命を持って民衆の命を助けるように祈った。すると、門の下敷きになった民衆は無事であった。このときのビザンティンから持ち帰った「聖母マリア」のイコンにちなんで、彼は「神の愛」を意味するボゴリュプスキーの異名を持つことになった。1154 年に敵手イジャスラフの死後、ユリー・ドルゴルーキーはキエフ公国の公位に坐し、1157 年彼が死を迎えるまで、その地位を保持することができた。彼は、自分がキエフ公国を治めると、キエフ近郊のチェルニゴフのヴィシィゴロドからロスチスラフを追い出し、その土地に信頼の厚いアンドレイ・ボゴリュプスキーを据えた。しかしユリー・ドルゴルーキーの目論見は成功せず、アンドレイ・ボゴリュプスキーは、北東ルーシ・スズダリへ逃げ帰った。

1157年にユリー・ドルゴルーキーがキエフで死亡する。ユリー・ドルゴルーキーが死亡してすぐに、アンドレイ・ボゴリュプスキーはロストフ・スズダリ公国を掌握した。アンドレイ・ボゴリュプスキーはロストフにもスズダリにも留らず、自分の好きな場所であるヴラジミル市に移動した。結局のところ、ロストフは有力豪族が実権を握っており、スズダリは、ユリー・ドルゴルーキーの強大な権威が残っていた。だから、アンドレイ・ボゴリュプスキーはこれらの都市では、政治的独立を導けるかどうかを比較して、自分の大胆な計画を実施するために完璧に公の権力を要求できないと判断した。アンドレイ・ボゴリュプスキーは多くの豪族家族をロストフやスズダリから追放した。同様に自分の異母兄弟たちを追い出した。このとき、異母兄弟4人とともに、ユリー・ドルゴルーキーの第2番目の妻は兄弟たちと謀をしたために、アンドレイは彼らを出身地であるビザンティンのコンスタンティノープルへ追放した。アンドレイ・ボゴリュプスキーは、自分の血縁者であっても容赦なく、土地の相続は均等に分割するようにした。彼は、血縁の優遇措置を無視し、厳格な社会基盤を築こうとしたため、血縁者はもちろんのこと、ユリー・ドルゴルーキーの上級従士たちからも、恨みを買うことになった。彼は、自分の最初の妻の兄弟で身分ある従士クチコヴィッチを処刑するが、のちに、1174年、被処刑者の兄弟や従士たちの陰謀によって、アンドレイ・ボゴリュプスキーは暗殺される。アンドレイ・ボゴリュプスキーの暗殺現場は、もともと彼の寝室であった場所で、現在は、ボゴリュボヴォの女子修道院に所在する。

ユリー・ドルゴルーキーは南方政策に熱心であったため、内政は常に問題を抱えることになった。アレクサンドル・ボゴリュプスキーは父の失敗を踏まえ、北東ルーシによるキエフ統治を現実化した。

#### 4. 周辺都市ボゴリュボヴォ

##### 1) ボゴリュボヴォの地形

ボゴリュボヴォという町はヴィシィゴラドを想起させる。ボゴリュボヴォはクリヤジムイ河から標高15メートルの場所にあり、ロストフ・スズダリ公国の首都ヴラジミルの近くに位置する。ヴィシィゴラドも同じようにドニエプル河川沿いで、キエフ公国の首都キエフの近くに位置する。アレクサンドル・ボゴリュプスキーはキエフへの対抗意識は激しく、キエフ公国制圧後は、首都をキエフからヴラジミルに移した。

ボゴリュボヴォはロストフ・スズダリ公国の水上主要幹線であるネルリ川

沿いに創設された新しい町であり、ロストフ・スズダリ公国とヴォルガ川との商業ルートの重要な関所にもなっていた。アンドレイ・ボゴリュプスキーは「自分が石の町を創造した」と言ったことが、年代記（年代記名確認中）に残されているとビクトル・パホモフは郷土史資料に記している。年代記に残されているこのアンドレイ・ボゴリュプスキーの発言を長い間、歴史家たちは信用していなかったが、1934年から1954年の遺跡調査によって、年代記に信憑性があることが明らかになった。ボゴリュボヴォ修道院基礎地盤から、白石のプレートが見つかり、もっと厚い西側の壁、主要な入り口の近くの壁の基礎も白石であった。

また、リベジ川を渡る橋の下に、古代ヴラジミルの道と、12世紀の銀の橋の基盤が横たわっている。ヴラジミルに通ずる道はキエフや諸都市とつながり重要な役割を果たした。特に、ヴラジミルの交易は盛んであり、公国の枠組みを超えて諸都市との間で、人や物資が行き交った。



ボゴリュボヴォ景観  
報告者撮影 2010年

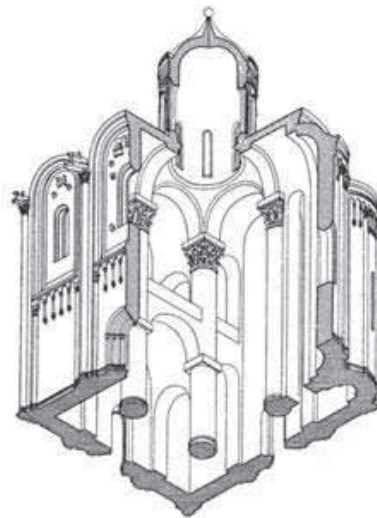
## 2) ボゴリュボヴォ女子修道院

N・N・ヴォロニンの意見によると、ボゴリュボフスキー宮殿（現在の降誕聖母聖堂）はよくできた公所有の建物である。素晴らしい公の宮殿の白壁と金メッキはロシアの伝統にのっとったものであった。間取りは、モニュメント的な宮殿のアンサンブルにおいて、ロシア建築を発展させたことはなかった。たとえば、12世紀のガリチでは、丸太造りの聖堂は木造建築から石造建築へ移行した。居住場所を備えた宮殿の教会〈半神聖〉なものとして使われた。それこそ、納屋であった。ボゴリュボヴォではその間取り図は白石のもと、全体を具体化し、白石とともに発達した。ボゴリュボヴォの宮殿建築とヴラジミルのウスペンスキー聖堂のフォームは多くの類似点があり関係性をうかがわせる。ボゴリュボヴォの宮殿建築からウスペンスキー聖堂は技術や価値観や創造性を受け継いだ。しかし、ボゴリュボヴォは俗的なアンサンブルにおいて、もっと強く、装飾豊富な建築の魅力を表している。

ボゴリュボヴォ修道院・ロジュデェストヴェンスキー聖堂の渡り廊下の壁は、修道院の写実を工芸的に描いて飾られ、アンドレイ・ボゴリュプスキー公殺害を壁に再現している。さらに、1階にあるアンドレイ・ボゴリュプスキーが暗殺された部屋が、かつて、彼の寝室であったことを伝えている。公の寝室が、1階の入り口近くにあったことは、非常に珍しい。塔を中心にして、多くの小さな部屋を渡り廊下でつないでいたからである。革命前の研究者たちは公の小さい居住間と塔をつなぐ、簡単な張り出した木製の渡り廊下がここに作られたと考えた。しかし、遺跡を見ると、木製のものではなく、白石の遺物が宮殿へ延びた渡り廊下として地中に保存されていたことが明らかになった。この遺跡によって、アンドレイ・ボゴリュプスキーが「自分が石の町を創造した」という発言を裏付ける証拠を1つ追加させることになった。



ボゴリュボヴォの宮殿. 1158—1165. Н.Н.Воронин による設計構想図



ボゴリュボヴォ宮殿聖堂. 12世紀.

Н.Н.Воронин による設計構想図

出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской.  
Книга-спутник по древним городам Владимирской земли. ” М., «Искусство»,  
1967.





アンドレイ・ボゴリュプスキーが暗殺された場所  
報告者撮影 2010 年



ボゴリュウボヴォの女子修道院  
12世紀のレリーフが残る渡り廊下の壁  
報告者撮影 2010 年

### 3) ポクロフ・ナ・ネルリ教会

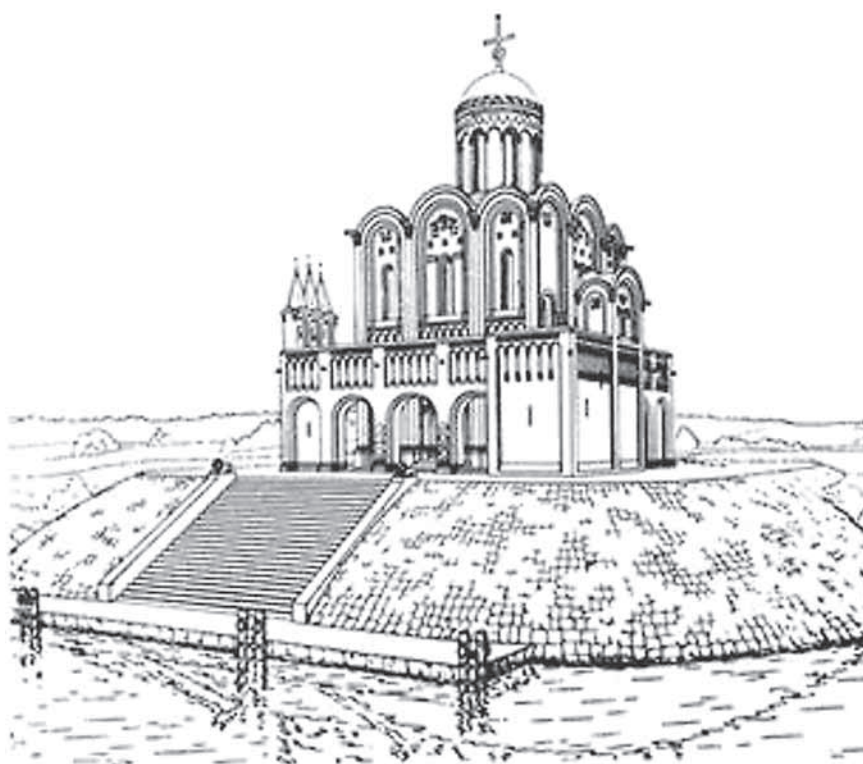
ポクロフ・ナ・ネルリ教会は、ボゴリュボヴォから 1.5 キロメートル離れたところに所在する。アンドレイ・ボゴリュプスキーが、戦死した息子イジャスラフを想い、追悼のためにこのポクロフ・ナ・ネルリ教会を建設した。ポクリフ・ナ・ネルリとは、ネルリ川沿いのポクロフ教会という意味である。



報告者撮影 2010 年  
ポクロフ・ナ・ネルリ教会

ポクロフ・ナ・ネルリ教会は、不幸にも、経過した 800 年間で 1 つの記念碑として過ごすことはなかった。建築の下部を見ると、重要な部分が失われ、中心の建物だけが残存している。さらに、1784 年にボゴリュボヴォの修道院長が修道院の鐘楼を建設するために、ポクロフ・ナ・ネルリ教会か

ら材料（主に白石）を取り出すことの許しを請うた。彼は、宗教長からその許可を受け取ったが、その切り出しは、うまくいかなかった。切り出すための請負人たちの費用が、掛かりすぎたからである。建物は崩壊を免れた。1803年、ポクロフ・ナ・ネルリ教会はそれまで見られた古い屋根に代わって、今ある球根状<sup>8</sup>の頭部になった。半世紀が過ぎた頃には、教会から北へ簡素な即席レンガ造りの門が鐘楼とともに、それらの下にあった。そのように、修道院のロジュデェストヴェンスキー聖堂の「修復」にまつわる疑問との関連において、ポクロフ・ナ・ネルリ教会周辺の最初の遺跡が見えてくる。



### ポクロフ・ナ・ネルリ教会.

Н.Н.Воронин による当初設計構想図

出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской.

Книга-спутник по древним городам Владимирской земли.” М., «Искусство»,

1967.

<sup>8</sup> 球根状の屋根は聖書創世記に出てくるエヴァが食した知恵のりんご（果物）を表している。

## 5. ヴラジミルの教会

### 1) ウスペンスキー聖堂

ウスペンスキー聖堂も上記の現・ゲオルギエフスカヤ教会と同様の経緯を持つ。1158年から1160年にかけて、アンドレイ・ボゴリュプスキーの命でアンドレイ公の聖堂として建設されたが、1185年に火災によって焼失し、1185年から1189年にフセヴォロド3世によってウスペンスキー聖堂として再建された。フセヴォロド3世は、白石の外壁を補強し、フレスコ画など内部を新しくした。ウスペンスキー聖堂はその後、1238年にタタールから襲撃（タタールのくびき）を受け、1536年には内部が焼けたが、1862年ゲオルギヤ聖堂のレンガを利用して壁を補強し、1888年から1891年にかけて、元の状態に戻した。

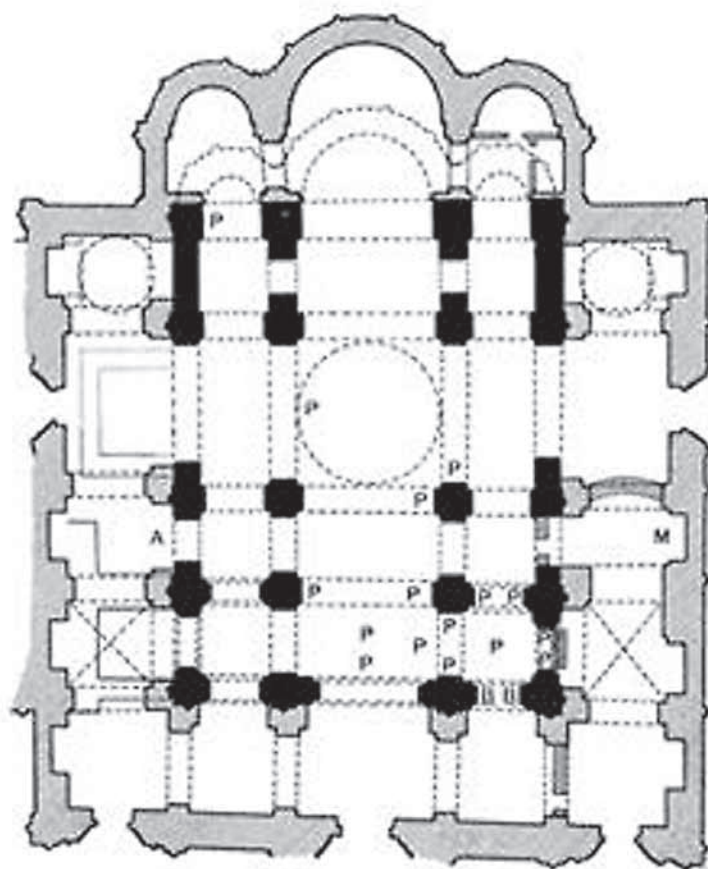
<表2>ウスペンスキー聖堂建築過程

年代	建築過程	支配者
1158年-1160年	アンドレイ公の聖堂として建立	アンドレイ・ボゴリュプスキー
1185年	市中大火災にて焼失	フセヴォロド3世
1185年-1189年	ウスペンスキー聖堂として再建	フセヴォロド3世
1238年	タタールから襲撃を受ける	ユリー3世？ヤロスラフ？
1536年	聖堂内部が焼失	
1862年	白石外壁の補強	アレクサンドル2世
1888年-1891年	原状に復元	アレクサンドル3世

ヴラジミル市のウスペンスキー聖堂はノヴゴロド公国のディシャティン教会（十分の一税教会）<sup>9</sup>やキエフ公国のウスペンスキー聖堂によく似ている。キエフ公国のウスペンスキー聖堂はビザンティン帝国（現トルコ）のアヤ・ソフィア聖堂を模倣している。一見、ヴラジミル市のウスペンスキー聖堂もアヤ・ソフィア聖堂の模倣のように思えるが、歴史的背景は上記の2つの教会・聖堂とは全く異なる。なぜなら、ヴラジミル市のウスペンスキー聖堂はキエフ府主教の承認なしに設計し、建設を行ったからである。そのことによって、一時期礼拝を禁じられることになった。ゆえに、ヴラジミル市

<sup>9</sup> 現存していない

のウスペンスキー聖堂はキエフからの独立の象徴であった。



## 6. ウスペンスキー聖堂設計図

聖堂の黒い部分 1158-1160 年、灰色の部分 1185-1189 年、点線の塗りつぶし部分現存しない壁 (14 世紀はじめ)、実践と点線- 北側空間の地下に残るホールに続く廊下の入り口跡 1158-1160 年。次のアルファベットは空間を保存し、フレスコ画のアクセスの概要を示す: A - 1160 年, B - 1189 年, M - 18 世紀, P - 1408 年。

出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской. Книга-спутник по древним городам Владимирской земли.” М.,«Искусство», 1967.



報告者撮影 2010 年  
ウスペンスキー聖堂

## 2) ドミトリエフスキー聖堂

ヴラジミル年代記には、ドミトリエフスキー聖堂建設開始の確かな記録は残されていない。ただ、同聖堂の建設者フセヴォロド3世の死亡記事で、彼の思い出として、「フセヴォロド3世は自分の宮殿に殉教者聖ドミトリーの〈素晴らしい教会〉を築いた。教会は数々のイコンや写実画で飾られた。」と記載されている。よって、建設時期が定かではない。しかし、関係ある十分に信用できる記録のデータは全て同聖堂の建設時期を1194年から1197年の間で定義付けている。聖堂の最後の歴史は少しばかり厳しいものであった。ドミトリー・ドンスコイが、聖堂について注意深く確認したところ、15世紀から16世紀にはフセヴォロド3世公の宮殿はまだ存在していなかった。

現在のドミトリエフスキー聖堂は16世紀にも18世紀にも火事の被害にあっていない。しかし、最終的には、結果として1837年から1839年にとっても残念な修復が行われている。ニコライ1世の要請に応じて、原始的な景観を

加味させた。そのことで、同聖堂は興味深い階段状の塔とギャラリーを喪失した。

同聖堂は 12 世紀に流行した、小さな聖堂である。都市流入者たちや封建階級者の宮殿が建てられたように、4 本柱を持つ 12 世紀の典型的な建築物である。

同聖堂は 1952 年に修復をしているが、この情報は N・N・ヴォロニンが研究論文を発表した 1961 年から遡って、最終履歴である。報告者は 1999 年にも、この聖堂を訪れているが、修復工事のため十分に調査できなかったことを記憶している。1961 年から 1999 年までの修復回数はこの海外調査では、追求することは出来なかった。



報告者撮影 2010 年  
ドミトリエフスキー聖堂

### 3) レリーフが持つ世界観

聖堂の外壁全面にレリーフを施していることは、ヴラジミル市の建築の大きな特徴である。残念ながら、市中を何度も見舞った大火災や、14世紀のタタール襲撃、またはソ連時代の宗教弾圧によって聖堂が消失し、多くは残存していない。従って、一般化した見解を提起することは難しいが、個別に検証をしながら、レリーフに表現された世界観を示したい。以下に挙げる3つの例はレリーフのテーマがはっきりしている。

第1に、ウスペンスキー聖堂のレリーフをとり上げる。レリーフのテーマは、「マケドニアのアレクサンドルの昇天」「セバスチャンと40人の殉教者達」「炎の中の3人の少年達」である。ドミトリエフスキー聖堂にも「マケドニアのアレクサンドルの昇天」と「炎の中の3人の少年達」のテーマは描かれている。「マケドニアのアレクサンドルの昇天」のテーマについては、現時点で報告者はまだ出所を明らかにすることはできない。「セバスチャンと40人の殉教者達」については、次のような事実が考えられる。すなわち、1160年代、40人からなる巡礼団がノヴゴロド市から聖地エルサレムに出かけたことが年代記（年代記名不明）<sup>10</sup>に記録されている。この巡礼団はエルサレムから聖者の遺骨を持ち帰ったという。「セバスチャンと40人の殉教者達」はその時のキリスト教巡礼者の一大事件をテーマに取り扱ったと報告者は推察する。さらに、「炎の中の3人の少年達」は1185年のヴラジミル市中の大火災を表現している。



208. Дми́триевский собор. «Вознесение Александра Македонского».

「マケドニアのアレクサンドルの昇天」

出典：Н.Н.Воронин”Зодчество Северо-Восточной Руси XII-XV вв.” М.  
1961

<sup>10</sup>田中陽兒・倉持俊一・和田春樹編集『ロシア史1-9~17世紀』、山川出版、1995年、p.443から導かれもので、年代記名は現在確認作業中である。





62. Успенский собор. «Три отрока в пещи»  
(схема по И. О. Карабугову).

「炎の中の 3 人の少年達」

出典：Н.Н.Воронин”Зодчество Северо-Восточной Руси XII-XV вв.” М.  
1961



63. Успенский собор. «Три отрока в пещи».  
Деталь (зстампаж).

「炎の中の 3 人の少年達」

出典：Н.Н.Воронин”Зодчество Северо-Восточной Руси XII-XV вв.” М.  
1961



ヴラジミル・ウスペンスキー聖堂 レリーフ  
報告者撮影 2010 年



ヴラジミル・ウスペンスキー聖堂 レリーフ外観  
報告者撮影 2010 年

第2に、ドミトリエフスキー聖堂の例を見てみよう。一説によると、同聖堂の壁には1000個以上ものレリーフが施されているという。N・N・ヴォロニンがドミトリエフスキー聖堂の4つの特徴を挙げている。

- a)ウスペンスキー聖堂と同じような様式である。
- b)教会や公の宝石館のような、芸術的モニュメントである。
- c)農村的。
- d)ロシア民衆の神話や御伽噺の世界に近い。

この中で a) 及び b) は建築そのものに関する見解であり、c)及び d)はレリーフに関しての見解である。ロシアには、口承文学が多く残されている。新しい「キリスト教」の聖堂に、古い「民衆の伝承文化」が反映されていると言えるかもしれない。後世、ロシアのキリスト教会や聖堂の外壁及び門の扉に英雄叙事詩（ブイリーナ）が表現されるようになる。宗教文化と伝承文化がうまく融合したことは、ロシアの文化の一端を垣間見るようである。N・N・ヴォロニンはドミトリエフスキー聖堂のレリーフを「ドミトリエフスキー聖堂のレリーフには動物のモチーフや、奇怪なモチーフなど独自の世界観が描写されている。」と、シンボル学的考察している。詳細については今後の課題とし、博士論文には、彼の見解及び、自分の見解を打ち出したい。



ドミトリエフスキー聖堂 ライオンレリーフ

出典：N.N.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской. Книга-спутник по древним городам Владимирской земли.” М.,«Искусство»,1967



ドミトリエフスキー聖堂 上部レリーフ ダヴィデのテーマ  
報告者撮影 2010 年



ドミトリエフスキー聖堂 下部レリーフ  
報告者撮影 2010 年

最後に、ポクロフ・ナ・ネルリ教会の例を見てみたい。同教会のレリーフは、天上のダヴィデが自然界や、地上を支配する構図を描いたものと思われる。ダヴィデはグースリを弾いており、足元にはライオンが仕えている。ライオンは神の守護神としての意味を持っている。N・N・ヴォロニンがレリーフのモチーフに関して、使用された個数、1人あたりの費やされた労働日数、当該モチーフに費やされた1人あたりの全労働日数を表にまとめている。

ポクロフ・ナ・ネルリ教会のモチーフ一覧

4. Расчет обработки резного и фигурного камня к плану 4

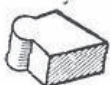








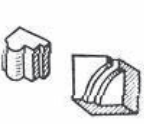

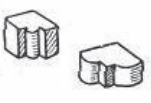
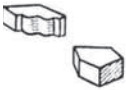


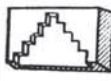

















部品の柄	数	労働日数 個	総労働日数	備考	部品の柄	数	労働日数 個	総労働日数	備考
 Угловая пилястра	104	1,42 0,34	147,68 35,26	Полу- чисто Чисто	 Элемент портала	54	3,0	162	—
 Стенная пилястра	156	2,60 0,34	405,60 53,04	—	 Капитель портала	48	4—5	72,90	—
 Угловая пилястра с частью стены	104	0,90 0,29	93,60 30,16	—	 Элементы окош	56	1,65 0,20	92,40 11,20	Полу- чисто Чисто
 Цоколь	85	1,40 0,23	119,00 19,55	—	 Элементы окош	56	1,65 0,20	92,40 11,20	Полу- чисто Чисто
 Элемент портала	293	0,86 0,13	251,98 38,10	—	 " "	96 30	1,65 0,20 1,65 0,20	158,40 19,20 4,95 6,0	—
 "	60	1,20 0,17	72,0 10,2	—	 " "	56 56	1,65 0,20 1,65 0,20	92,40 11,20 92,40 11,20	—

Таблица расчета рабочей силы по Покрову на Нерли

出典：N.N.Воронин”Зодчество Северо-Восточной Руси XII-XV вв.” М. 1961

Окончание

部品の柄	数	労働日数/個	総労働日数	備考	部品の柄	数	労働日数/個	総労働日数	備考
	48	0,59	28,32			52	1	52,0	
Элементы окон	48	0,24	11,52		Сухарчатый поясок на барабане	1			
		1,44	69,12						
		0,30	14,40						
	10	5	50			30	2	60,0	
Капиталь полуколонки					Зубчатый фриз на барабане				
	85	0,36	30,60			16	3	48,0	
Сухарчатый поясок над аркатурой		0,25	21,25		Капиталь на барабане				
	68	1,46	99			3	5	15,0	
Аркатура фриз		0,43	29,24		Фигура Давида				
	55	4	220,0			6	2	12,0	
Аркатурный фриз; капиталь					Птица				
	47	1	47,0			6	2	12,0	
Аркатурный фриз; колонка					Фигура льва				
	47	2	94,0			6	2	12,0	
Аркатурный фриз; база					Фигура льва				
	47	2	94,0			19	2	38,0	
Аркатурный фриз; консоль					Мозаика				
	24	2	48,0			6	4	24	
Аркатура барабана					Гриффон				
	24	1,5	36,0			20	5	100	
Пояс под аркатурой барабана					Резная плита				
						20	1,5	30,0	
					Профиль внутри барабана				

出典：Н.Н.Воронин”Зодчество Северо-Восточной Руси XII-XV вв.” М. 1961

今回示したかったことは、それぞれのレリーフには独自のテーマがあり、その背景には史実が存在することである。また、ロシアの口承文学や英雄叙事詩が根拠となっているのではないかという方向性も打ち出せたことと思う。N・N・ヴォロニンがまとめたように、モチーフの種類と個数を洗い出すという方法をレリーフ全て<sup>11</sup>で行えば、何らかの手がかりが得られると予想する。今後、これら個々の教会のレリーフを綿密に分析することで、新たな見解を打ち出したい。

## 6. キエフとの関係性

### 1) ルーシにおけるキエフの立場

ルーシの起源は諸説あり、発端となる可能性がある中心都市は、ノヴゴロド、キエフ、ペレヤスラヴリ、スモレンスク、ロストフである。キエフやノヴゴロドが発端とする説が有力である。報告者はそのどちらも現段階では支持できないが、ロストフが発端となる可能性は否定的に見ている。なぜなら、前述したように、ロストフは他民族が混在して商業都市としての基盤はあったが、政治的統一を図ろうとする原動力は、キエフの統治者ヴラジミル・モノマフに端を発していると考えからである。

キエフの軍事産業的立場は、対外的安全と商業的利害を守ることに高い意義を与えた。商業－産業活動の結節点として全ルーシ的意義をもち、そのために全国土の政治的結集の中心となった。

キエフ・ルーシという言葉は、キエフ公国 1 国を指すのではなく、キエフを中心とする地方分権化した諸公国全てを指している。地方分権化が進むに至った理由は、支配領地に関して遺産相続の際に土地分配を行い、世襲制を保っていたためである。子孫が増えるにつぎ、公の数も増加し、支配領地を巡る争いが絶えなくなった。

アンドレイ・ボゴリュプスキーは 1169 年キエフ公国との戦いに勝利して、キエフからヴラジミルへ首都を移した。アンドレイ・ボゴリュプスキーがキエフ公国を征圧後、キエフのヴラジミルに対する優越は陰に隠れることになる。しかしながら、キエフの優越は他公国に対しては維持されており、キエフ公国の公座をめぐる争いは絶える事がなかった。

---

<sup>11</sup> 研究調査対象は、以下の6件である。ウスパンスキー聖堂、ゲオルギエフスキー聖堂、ドミトリエフスキー教会、ロジュジェストヴェンスキー教会、ロジュジェストヴェンスキー修道院、ボクロフ・ナ・ネルリ教会

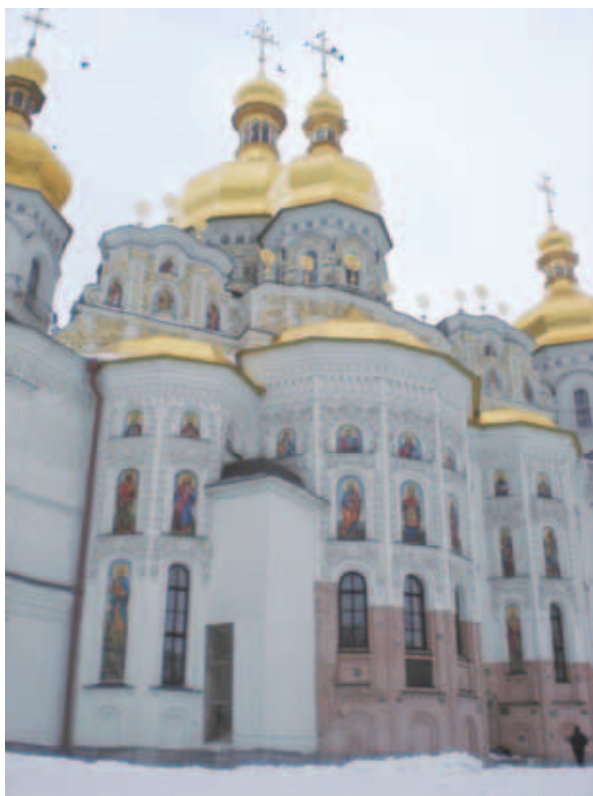
## 2) キエフの教会建築とヴラジミルとの関係

ロシア・ヴラジミルのウスペンスキー聖堂が、ウクライナ・キエフのウスペンスキー聖堂を模倣したということは、前述した。キエフのウスペンスキー聖堂はペチェルスキー修道院の中に所在する。ペチェルスキー修道院は全ルーシに対して強い宗教的権力を有していた。地方分権制度の下、同修道院は歴史編纂の重要な役割も果たしていた。

キエフの現在のウスペンスキー聖堂の内部には、初期のウスペンスキー聖堂が保存されている。現在のウスペンスキー聖堂が、初期の聖堂を保護する役割を果たしている。初期の聖堂は、レンガ積みになっており、白壁にはなっていなかった。外を覆う建物はレンガ積みの上から、白壁になるように塗装されている。

ヴラジミルはキエフの教会建築を意識している。同じ名前を持つウスペンスキー聖堂を持つことや、ヴラジミルの地名にキエフを思わせる名称が与えられること、地形と建築のバランスを考えた都市計画であることは、それを証明している。しかし、キエフも同様であり、ヴラジミルの地名にキエフと同じ名称を与えることで、キエフの権力の偉大さを示そうともしていた。ところが、ヴラジミルは西洋の様式を取り入れ、キエフ公国の建築の法律や習慣を遵守しなかったために、キエフ公国はヴラジミルの教会建築を承認しなかった。キエフが承認しなかった西洋の文化が取り入れられた背景には、以下のような事情があった。





ウスペンスキー聖堂外観  
報告者撮影 2010 年



ウスペンスキー聖堂内部  
報告者撮影 2010 年

12世紀初め、ヴラジミル市では首都建設の大事業には地元の職人が不足していた。ユリー・ドルゴルーキーは、「ルーシ全土から職人達を」<sup>12</sup>招集したがうまくいかなかった。年代記には「神が（世界）全土から職人を送り届けてくれた」<sup>13</sup>と記載されている。修道士達が年代記を編集したので、この言葉はキリスト教思想を思わせる文章ではある。ここで、報告者が示したいのは、ルーシの中では職人を集めることが出来なかったという状況である。そして、職人達たちは、現在のヨーロッパ諸国に位置する、ルーシから見て西側の西洋から送られた異文化を具える人々であった。つまり、これらの職人達は、キエフ公国やドニエプル流域からのレンガ積みの専門家ではなかった。彼らは白石建築の技術職人で、多くは西洋のロマンス派（ローマ中心の建築美術集団）からの職人であった。彼ら職人達は、フリードリッヒ・バルバロッサ皇帝<sup>14</sup>よりアンドレイ・ボゴリュプスキーの元へ派遣されていた。キエフ公国からの内政干渉脱却を進めることで、ヴラジミル市が他の地域と一線を画し、独自の文化を見出す結果を導いたと考えられる。

一方で、ノヴゴロドはキエフと友好的に関係を結んでいた。ヴラジミルが、キエフを意識し教会建築を建設したのと同様に、ノヴゴロドのソフィア聖堂もキエフ・ソフィア聖堂を模範とした。次章でノヴゴロドについてはもう少し詳細に紹介する。

## 7. ノヴゴロドとの比較において

### 1) 教会建築繁栄の背景

ヴラジミル市の建築は白石の外壁にレリーフを装飾しているのが特徴である。それらのレリーフは、キエフ公国やノヴゴロド公国などの建築装飾と比較にならない程大規模である。ヴラジミル市のウスペンスキー聖堂を手がかりに、他地域とは異なる建築様式の背後に存在する問題を考えてみたい。

ノヴゴロド公国と比較した場合に、ヴラジミル市の特徴がより明確になるだろう。前述したように、12世紀石造建築が建設されたのは、キエフ公国、ノヴゴロド公国、そして、ヴラジミル市のみであった。そのほかのル

---

<sup>12</sup> 年代記の表現をそのまま翻訳した。引用：Н.Н.Воронин“Зодчество Северо-Восточной Руси XII-XV вв.” М. 1961

<sup>13</sup> 注釈 10 と同様。引用：Н.Н.Воронин“Зодчество Северо-Восточной Руси XII-XV вв.” М. 1961

<sup>14</sup> フリードリッヒ・バルバロッサ（在位 1152-1190）神聖ローマ皇帝 Н.Н.Воронин“Зодчество Северо-Восточной Руси XII-XV вв.” М. 1961

ーシ地域では、木造建築しか建設されなかった。しかしながら、ノヴゴロド公国も、ヴラジミル市も住居など多くの建築物が木造であったため、市中で火事が起こった場合には、大きな被害を受けた。ノヴゴロド公国が石造建築を多く持つことになったのは、宗教的にビザンツ帝国との関わりが深かったためである。ノヴゴロド公国も、ヴラジミル市と同様にキエフ公国からの内政干渉脱却を早くから試みる。ノヴゴロド公国は、教会の大主教を正教会における聖職位階制の最高位である総主教に格上げし、ビザンツ帝国から認められた。そのため、キエフ公国から宗教的援護を求めるのではなく、直接ビザンツ帝国と交渉を持った。ノヴゴロド公国からのビザンツ帝国への殉教者が多いのもそのためである。キエフ公国はノヴゴロド公国に対して、宗教的には穏やかに対応したと予想される。一方、ヴラジミル市は 1169 年にアンドレイ・ボゴリュプスキーがキエフ公国を陥落させ、武力による政治的解決を図った。そのために、教会建設はキエフ公国からの承認を得られなかった上に、公邸宅内の教会聖堂の礼拝は厳しく禁じられた。

## 2) 民衆レベルの文化交流

次に、ノヴゴロド、ヴラジミル両都市の異文化交流を見てみる。ノヴゴロド公国はギリシアから絵師や建築家を招致した。ビザンツ帝国もギリシアも東方正教を国教としたことから、この3国の宗教的なつながりは深かった。また、ノヴゴロド公国にはハンザ商人が居留していた。しかし、13世紀から17世紀まで「ノヴゴロド商館規則」なるものが存在し、ハンザ商人の自由を規制していた。居留地は限定され、その周囲には塙が張り巡らされていた。夜は塙の門が閉じられ、番犬が放たれた。一般民衆とは全く隔離され、接触は無かった。一方、ヴラジミル市には、前述したように、神聖ローマ皇帝から石造建築の職人が派遣されていた。これらロマネスク様式を軸とする西洋職人達はヴラジミル市の職人達を育成した。つまり、異文化人と民衆が隔離されることは無かった。

ヴラジミル市の石造建築がルーシでは少数であったことは前述した。さらに、高い文化発展を果たしたノヴゴロド公国でさえキエフ公国とは主従関係を表向き保っていたのに対し、ヴラジミル市は政治的にも文化的にもキエフ公国の支配からの内政干渉脱却を目指した。この政治的文化的な要因は建築にも大きな影響を与えていた。これは、アンドレイ・ボゴリュプスキーの政策によるところが大きかったといえよう。アンドレイ・ボゴリュプスキー死後フセヴォロド3世がヴラジミル市を統治するまで、ヴラジミル市は混乱を極めキエフ公国から内政干渉されながらも、独立路線を模索し続けたの

は、民衆の力が多少なりとも影響したと考えられる。

## 8. 今後の課題と目標

冒頭でも述べたが、この報告書には海外研修で得た資料の全てを網羅することが出来ていない。N・N・ヴォロニンの研究書はロシアの建築美術史において基本的テキストとなっている。N・N・ヴォロニンの研究を日本語で紹介することは大切な課題であると報告者は考えている。

政治政策と教会建築が密接に関係することが今回の海外研究調査で推測の域を超えて明らかになった。前述したヴラジミル市発展の経緯は、大きな枠組みを作ることが出来たが、ユリー・ドルゴルーキー、アンドレイ・ボゴリュプスキー、フセヴォロド3世各統治者の政治手腕、経済発展、都市計画、建築文化の発展についてもっと詳細な分析をするべきである。

また、報告者が特に関心を寄せている教会外壁レリーフに関して、考察すべき課題の一部を以下に列挙しておく。

- a)ヴラジミルの建築職人達の問題として、どのような経緯でローマ皇帝フリードリッヒ・バルバロッサから職人が派遣されたのか?
- b)外壁レリーフは誰の発案であったのか?
- c)キエフ公国が保持する建築に関する取り決めや習慣について

レリーフに秘められた世界観をより明確にするためには、ポクロフ・ナ・ネルリ教会以外の、教会レリーフに関して、モチーフ種類と個数の分類表作成は必要な作業である。モチーフの様式、各モチーフが持つ意を可能な限り追求していきたい。

今回は建築関係の資料を精査するに留まっているため、二重信仰の問題に未だ追及しきれていない。N・I・コストロマロフによれば、12世紀には土着信仰も、古代の民族性も消失していた。しかし、他説によると、農村部では19世紀まで土着信仰を尊重していたとも言われている。フィン系民族が多く居住する地域では、三重信仰とも言えるような環境であったとB・O・クリュチェフスキーは述べている。二重信仰が続いた年代を12世紀までという説、19世紀まで存在したという説様々であり、諸説の根拠を明確にし、地域を限定することで、新たな見解を提唱できると報告者は考える。これらの課題を克服し、博士論文に活かしたい。

## 参考文献一覧

Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской.

Книга-спутник по древним городам Владимирской земли. ” М.,«Искусство»,  
1967.

Н.Н.Воронин”Зодчество Северо-Восточной Руси XII-XV вв. ” М. 1961

田中陽兒・倉持俊一・和田春樹編集『ロシア史 1 - 9 ~ 17 世紀』、山川出版社、  
1995 年

В・О・Кリュчевский著、八重樫喬任訳『ロシア史講和 1』恒文社、1979  
年

松木栄三著『ロシア中世都市の政治世界 都市国家ノヴゴロドの群像』、彩流社、  
2002 年

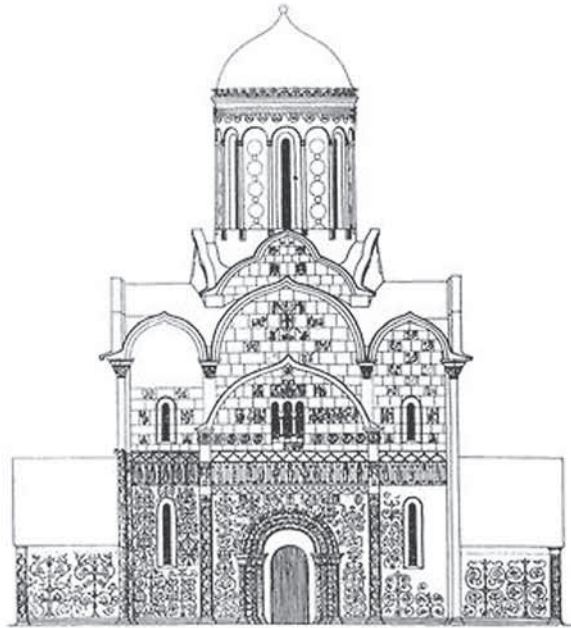
参考資料



12～13世紀のキエフ・ルーシ

出典：「ロシア史1-9～17世紀」

田中陽兒・倉持俊一・和田春樹編集、山川出版、1995年



### ゲオルギエフスキー聖堂 Г. К. Вагнер による全体構想図

出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской.  
Книга-спутник по древним городам Владимирской земли.” М.,«Искусство»,  
1967.



### ゲオルギエフスキー聖堂の北側

出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской.  
Книга-спутник по древним городам Владимирской земли.” М.,«Искусство»,  
1967.



ゲオルギエフスキー聖堂 北側アーチ上層部

出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской.  
Книга-спутник по древним городам Владимирской земли. ” М.,«Искусство»,  
1967.



ゲオルギエフスキー聖堂 屋根に続く壁角

出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской.  
Книга-спутник по древним городам Владимирской земли. ” М.,«Искусство»,  
1967.





### ゲオルギエフスキー聖堂のレリーフ

出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской.  
Книга-спутник по древним городам Владимирской земли. ” М.,«Искусство»,  
1967.



### ゲオルギエフスキー聖堂 南側

出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской.  
Книга-спутник по древним городам Владимирской земли. ” М.,«Искусство»,  
1967.



### ゲオルギエフスキー聖堂 イエスと聖霊のレリーフ

出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской.  
Книга-спутник по древним городам Владимирской земли. ” М.,«Искусство»,  
1967.



### ゲオルギエフスキー聖堂 動物門のレリーフ

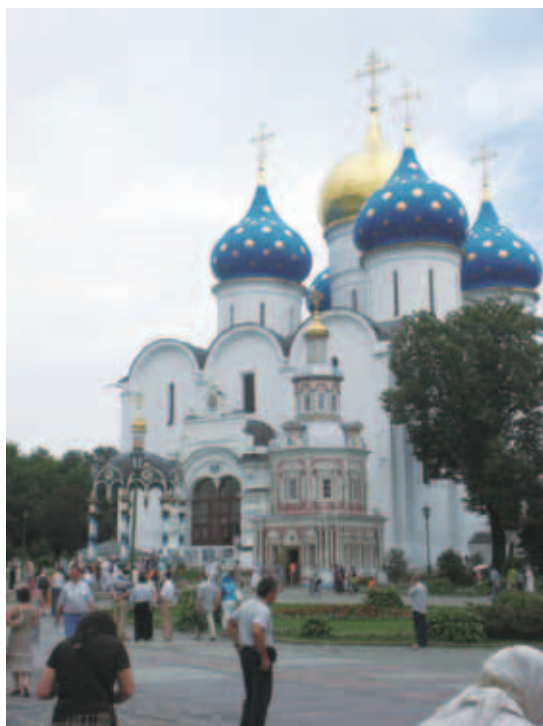
出典：Н.Н.Воронин” Владимир, Боголюбово, Суздаль, Юрьев-Польской.  
Книга-спутник по древним городам Владимирской земли. ” М.,«Искусство»,  
1967.



モスクワの救世主教会  
報告者撮影 2010 年



ヴラジミルのニキーツカヤ教会 17 世紀建立  
報告者撮影 2010 年



セルギエフ・パッサート  
報告者撮影 2010 年



セルギエフ・パッサート聖水場所  
報告者撮影 2010 年



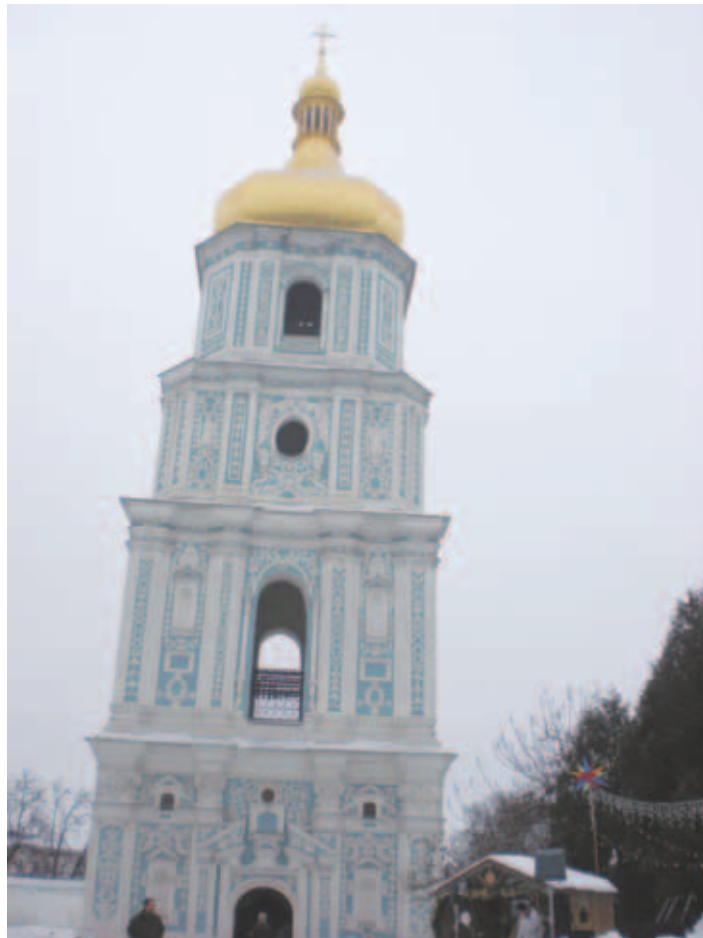
ドミトロフ市男子修道院 12 世紀創設、17 世紀建立  
報告者撮影



ドミトロフ市郊外 17 世紀建立の教会  
報告者撮影 2010 年



ドミトロフでの Anastasia Banchaeva 教授引率のセミナー



キエフ・ソフィア聖堂  
報告者撮影 2010 年



キエフ・ペチェルスキー修道院の城塞  
報告者撮影 2010 年



キエフ・ペチェルスキー修道院の三位一体教会  
報告者撮影 2010 年

海外研究報告書  
[ 中世ロシアの教会建築 ]  
ヴラジミル地方の都市計画

平成 20 年度文部科学省 GP「国際化拠点整備事業（長期海外留学支援）プログラム」採択  
龍谷大学「長期海外留学支援プログラム」採択

---

2011 年 3 月 発行

著 者 川村明海 (Akemi Kawamura)  
龍谷大学大学院 国際文化学研究所 博士後期課程 3 年

印刷所 株田中プリント